

NPO初の病院建設 5年間で神戸市の殺処分数50%削減へ事業が動き出す



神戸市内の市民団体アニマルレスキューシステム基金(神戸市、山崎ひろ代表、会員986名)は2006年11月11日、神戸市灘区に繁殖抑制専門病院、"No Moreホームレスアニマルクリニック"を開設した。

北米では各地に見られる100%NPO運営のチャリティークリニックで、同団体は特定のエリアに絞り込んでノラ猫を中心に短期間集中的に、早期(生後2ヶ月頃から手術可能)不妊去勢手術を実行し、管轄自治体の処分数削減に事業がどう影響するかを5年かけて試験する。

その第一弾として、今春のノラ猫の発情出産シーズンを前に、3月から同団体を中心となって不妊去勢キャンペーンを打つ予定。詳細は後述の同クリニックの電話かメールまで。

日本でこの手の本格的な事業が行われるのは初めて。

5000を超える動物収容施設(シェルター)があるとも言われるアメリカでは、過剰繁殖が原因で収容されたり、個人が飼えなくなったペットを引き取るだけでは繁殖抑制に実質的な効果が得られなかったため、90年代に入ってから本格的に個人獣医師と多くの愛護団体が団結し、40ドル以下(5000円以下程度)の安価な不妊去勢クリニック開設の動きや、病院を併設するNPO主催の無料不妊去勢キャンペーンが各地で見られるようになった。

一流ホテルを貸しきって野良犬猫問題を解決するためだけの専門の国際会議を開催したり、アメリカ郵政公社(USPS)が切手のデザインに不妊去勢を普及させるデザインを起用したりと様々な取り組みを始めるなど、官民をあげての戦略的な協力体制が長年築かれてきた。その成果あってか70~80年代に年間1000万近くだった処分数は約500万頭まで半減したとされる。

日本では自治体の犬猫処分数の70~80%を占めるのは3ヶ月以下の子犬子猫。その中でも猫の繁殖抑制に取り組んでこなかった日本では、子

猫の処分数が際立って多く、ほぼ100%が国際的に非人道的な方法としてランクされる窒息法で処分されているのが実情だ。

この問題の解決には、アメリカ獣医師会・各州獣医師会や代表的な政府公認団体が承認する早期不妊去勢手術(初回発情期前の手術:生後3~4ヶ月頃で譲渡前)が最も有効で、この技術を日本中で普及させることが動物愛護の理念になったものだとしている。

この5年間の試験事業で処分数削減に一定の成果が出れば、後に全国的な波及効果が見込まれることから、同団体では当面処分数の大半を占める猫、特にノラ猫を中心に手術を施し、現在約4000頭の神戸市の年間処分総数を、5年後の2011年度には50%削減したいとしている。同団体は震災後の神戸の過剰繁殖と殺処分問題の現状を冷静に分析。税金を使用したペット殺処分問題解決に10年間の準備期間を経てこの度の開業に至った。

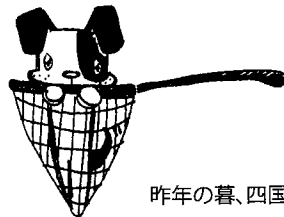
詳しいお問い合わせは
アニマルレスキューシステム基金
078-856-3229 spay@animalrescue-sf.org

Tokushima puppy rescue

At the end of last year a puppy got stranded on a cliff face in Bizan, Tokushima Prefecture, Shikoku. It's high drama rescue was covered by several TV stations and as a result Tokushima hokensho was inundated by people offering to adopt the puppy. What a golden chance for Tokushima hokensho; not only to find a wonderful home for that puppy but to find homes for all the homeless dogs and puppies it gasses everyday. It would also have been a golden opportunity to promote the importance of neutering to prevent all these homeless puppies being born in the first place. But Tokushima blew its chance away.

At the end of January it held an adoption event, again covered by the media and people queued up to adopt the puppy 'Riri' they had all seen on TV. Instead of interviewing everyone to find the most suitable owner, the hokensho handed everyone a number and then drew lots to find a winner. Thus Riri was handled like a door prize and the person who won her was far from the best owner for a nervous puppy; a 66 year old woman who was a first time dog owner. As a result she took her home and chained her outside

where poor Riri cried all night. There is no way that a nervous puppy is going to bond with its new owner being treated like this. She should have at least been taken into the house. But the hokensho never consider this, nor did they get Riri, now eight months, neutered. We can only guess the result; more puppies born to be killed and Riri herself probably dumped when this new owner gets tired of her.



徳島県はせっかくのチャンスを活かさなかったのか?

昨年の暮、四国の徳島県で、1匹の子犬が眉山の斜面に迷い込み、身動きとれなくなりました。救出劇の見せ場が報道陣によりテレビ中継されたため、県の動物愛護管理局には、子犬を引き取りたいと願う人たちから申し出が殺到しました。保健所にとっては、またとない機会だったはずですが——子犬の引き取り手を見つけるだけでなく、ガス室で毎日殺される野良犬たちに里親を募る絶好のチャンスでもあり、……そもそも、行き場のない子犬を生まれさせないために、不妊手術の大切さを広める好機だったのではありませんか。しかし、徳

島県はそのチャンスをみすみす逃してしまったのです。

今年1月下旬、徳島県は、救出された子犬の飼い主を決める譲渡会を開きました。またしても、メディアが大々的に報道したため、「がけっぶちの犬」を貰い受けたいと人々が行列を作りました。保健所がとったやり方は、希望者全員と面接した上で最もふさわしい飼い主を選ぶのではなく、みんなに番号を渡して抽選で当選者を決めるというもの。こうして、雌犬は福引賞品のように提供され、「当たった」のは、神経質な子犬の主人としてはふさわしくない、犬を飼うのは初めてという66歳の女性でした。その結果、彼女は犬を連れ帰って家の外につないだため、リンリンと名付けられた子犬は、かわいそうに一晚中鳴き明かしたとか。精神不安定な子犬がこんな扱いを受けては、新しい飼い主に打ちつけられるはずがありません。少なくとも、家の中で飼育すべきです。徳島県動物愛護管理局は、そんなことは何も考慮せず、今や8か月になったリンリンに不妊手術もしていません。「救出劇」の結末が予想されます——またしても、子犬が何匹も生まれては殺され……リンリン自身も、飼い主に飽きられて捨てられる——こんな幕切れにならないことを祈るばかりです。